【資料紹介】

根岸佶の時事評論：「支那動亂と赤化」（『東京朝日新聞』1923.11）

東亜同文書院大学記念センター長、現代中国学部教授　三好 章

根岸佶は、周知のように東亜同文書院最初期の教授のひとりであり、『支那ギルドの研究』『買辦制度の研究』などで知られる、中国近代経済、中国社会研究の大先達の一人である。それと同時に、根岸は東亜同文会の機関誌であった『支那』の巻頭言を略毎号しるし、また『朝日新聞』に籍を置いて中国に関する時論を執筆していた。

ここに紹介する「支那動亂と赤化」は、『東京朝日新聞』に大正 14 年、すなわち1923年11月半ばに6日にわたって連載したものである。すでに 1919 年にはロシア共産党によってカラハン宣言が発せられてツァリーズム=ロシアとの訣別、「進んだ」社会主義、民族主義の支援などの麗しい語句に孫文が感激し、いっぽう北京政府も基本的にこれを受諾して友好的な関係が築かれはじめていた。いっぽう、南では中国におけるロシア共産党が承認したメンバーによって中国共産党がコミンテルン中国支部として 1921 年に成立して 2 年、共産党を受け入れる形での第一次国共合作が成立する直前であった。こうしたことからも容易に想起できることではあるが、次第に共産主義勢力が影響力を持ち始めていた。コミンテルンからはヨッフェが送り込まれ、孫文との間で共産党の受入による合作が確認されはじめていたのである。

こうした情勢下、国際的には中国を代表する政府として承認を受けていた北京政府は軍閥政権との非難を内外から浴びながらも、北京において関税自主権の恢復をめざした特別関税会議開催を目指し、また国民国家を志向するものとして租界の回収を含む様々な権益の回収運動、すなわち国権回収運動を進めていた。根岸自身は『支那特別関税会議の研究』を 1926 年に出版するのであるが、当時の現在進行中の中国社会の変動に目を向け、北京政府の政策動向を注視し、同時にその内部構造の動揺に目を向けている。

したがって、「支那動亂と赤化」は北京政府の基本方向として国権回収運動に着目しつつ、北京政府内部にも国民党内部にもそれぞれに分派活動が展開されていること、その間隙を縫うように「赤化」が進む、すなわち共産党勢力が伸長する危険性を指摘している。そして、日本を含む各国は、北京政府の主催者である段祺瑞を支えるべきである、とする。このことは、最終的には共産党による権力奪取に終わったこともまた周知の事実であろう。

根岸の時論そのものは、東亜同文会に脈々と息づくアジア主義の流れをくむものである。当然ながら、しかしながら、それだからといって一刀両断に切り捨てるわけには行くまい。根岸の関心と願望は、中国の新たな発展が日本と共に進むことにある事であり、そこに日本が中国に対してできるだけの配慮を行うことなのである。当然、アジア主義の底流にある「日本のリーダーシップ」はア・プリオリに前提されている。そして、現実の歴史の流れは、北京政府から見れば「反

乱軍」であった広東の国民党による「北伐」が勝利することでこの問題は一段落する。実際の国権回収には、第二次世界大戦を待たねばならないが、その意味では根岸のさしあたりの展望は、はずれたことになる。歴史の後知恵で根岸の時論を批判するのは容易であるものの、その後の中共の成長を感じ取っていた点は、戦後の彼の中国研究に結びついているとも言えよう。

とまれ、今後根岸の時論を少しずつ紹介していきたい。

『東京朝日新聞』大正 14 年 11 月 13～18 日

※変体仮名はひらいたが、それ以外のかな遣いなどはそのままとする。また、本来掲載されていた写真については、印刷不鮮明のためキャプションのみとした。

【一】11 月 13 日（朝刊）

クーデター

ワシントン会議以來、支那國民の鶴首して待ち設けて居た、特別關税会議が開催せられ、パリー、ワシントン兩會議で問題にせられなかつた關税自主權問題も、日本の提唱に依つて、主義上列國に承認せられ、若し日米間に附加税額につき妥協整うたなら、会議が無事に成功すべき見込あり、日本が日清日露兩戰役を経、辛うじて回復した税權を、支那は談笑の中に回復できるはずであつた。然るに北京からの飛報に依れば。馮玉祥がクーデターを行はんとして居るから、同会議もまた中止になるだらうとのことだ。不幸と言はねばならぬ。馮玉祥に如何なる處置に出づるか、未だ的確に判らないが、現執政政府を廃止し、勞農露國の制度にならひ、唐紹儀を首領とし王正廷黄郛を中堅とする中央執行委員會を組織する計劃である。然し内外の形成に依つては、等分段祺瑞のみ引留めて、王、黄國民黨のもので政府を組織するかも知れぬとのことだ。若し豫定の計劃實行せらるゝことになれば、如何なる影響を極東に及ぼすだらうか、寒心に堪へない。

國民黨の陰謀

この計劃は別段新しいものでなく、馮玉祥が第二次奉直戦争のたけなはなるに乗じ、クーデターを行つた時、國民黨の策士と圖り、略同一の案を施さうとしたことは、今尚世人の記憶に存するだらう。當時馮や國民黨の實力足らなかつたので、段祺瑞が執政政府を樹立し、段を擁護する張作霖が中原を横行することとなったのは、彼らにとり非常な不平であつたらう。彼等は政府に對抗する必要上、勞農露國から武力的金錢的援助を受けたが、王正廷一派の國民黨は、世人のうはさする程赤化したものでなく、官僚や軍閥の舊弊を脱した新政を行ひ、孫逸仙の標ばうした三民主義を實現したいくらいであるらしい。王正廷と親善な馮玉祥は、軍閥の巨頭であるが、呉佩孚や張作霖と異なり、新知識の意見に耳を傾けるのみならず、得心した時は之を實行するので、國民黨間に人望がある。國民黨は武力において劣るが、その主張は支那の知識階級、殊に急進的な學者や學生に歡迎せられ、支那各方面に恐るべき潜勢力があつて、何時か官僚や軍閥に代わつて政権を執る抱負を持つて居た。會々（たまたま）特別關税會議が開かれ、附加税增徴に依る巨額の金錢北京政府の庫中に入ることになれば、段祺瑞や張作霖の勢力を强大ならしめるから、段張に反對するものと策應し、同會議を打ち毀さうと企て、勞農露國もまた同會議の成功に依り、資本主義國家と支那の帝國主義者と結託することを好まないから、暗に打倒運動を援けた。折柄

張作霖が江蘇を占領したので、危險を感じた孫傳芳や岳維峻を動かし、遥に馮玉祥と通じ、長江上流に虎せう（嘯）して居る。呉佩孚を擔ぎ、先孫傳芳をして兵を擧げしめた。張作霖は事態容易ならざるを見、一面戰線を縮小すると共に、他面關内に增兵し、特に馮玉祥に備へ、各方面と妥協を試みた。呉佩孚の舊部下蕭耀南は湖北境外に出兵することを避け、岳維峻は呉佩孚の爲その所領河南を奪はるるを恐れて兵を動かさず、馮玉祥も自重したので、呉と孫とは一時窮境に陷り、支那に戰亂なく、關税會議無事なるべしの説さへ生じた。呉佩孚の舊部下河南に居る三個師團は孫傳芳と軍事行動を共にしたのと、國民黨の暗中飛躍に依り、遂に馮孫岳の間に協商成立するに至つた。今日とても敵味方の軍閥巨頭個人關係においては、尚妥協の見込ないこともないが、軍閥巨頭を擁する左右の實力者は、國民黨系のもの少なくないので、到底決戰の外あるまい。國民黨の思慮周密なる、單に内政のみならず外交にも大いに注意を拂ひ、王正廷の如きは、當初より段執政の下で關税會議を成立せしめないやう種々畫策し、巧に日英兩國を離間して、會議で正反對の地位に立たしめ、國際的協調を破壞し、如何なる珍事發生しても、當分列國協同で支那に對抗出來難いやうにした。か
くの如く内外の準備整つたから、クーデターに取かゝつたが、預期の通りの筋書を行ふかどうかは、數日中の内外の形勢で決まるだらう。
（中央に「王正廷」（右）・許世英（左）の写真）印刷不鮮明のため写真略とする。

【二】11 月 14 日（朝刊）

外人のき憂

革命以後十四年、支那に動亂絶ゆることなく元首を換へること七たび、内閣の更迭の如きは枚擧にいとまない。從つて今回討張を標ぼうする戰爭起こつたり、假令馮玉祥や國民黨が政權を執つたからとて別段怪しむに足らない譯だ。然るに今回之を問題とするに至るのは目下開催されて居る關税會議に支障を來す恐れあるばかりでなく、支那の赤化の憂ひあるからだ。露支國交回復以來、勞農政府の支那赤化運動次第に効果を奏し、殊に孫逸仙や馮玉祥との關係密接になったので、在支外人は豫てから、孫馮などが政権を執るやうになれば、支那をしていよ／＼赤化せしめ、外人が多年支那に扶植した各種の権利利益じうりんせらるるに至るとき憂して居つた。然るに今やそのき憂を可能ならしむる恐れ出來かけてきたのだから、外人にとり問題であらう。

國民黨の赤化

支那は動亂の絶え間なく、軍閥ばつこして小民途に安んじない、又經濟上外交上列強の壓迫に苦しめられて居るから、勞農政府に乗ぜられ易い。殊に國民黨は急進的であつて、三民主義などを標ぼうし、共産主義に接近するばかりでなく、相當に整つた組織を持ち、周圍に幾多の信者を控へて居るので勞農政府がその主義を支那に流布するにつき、國民黨を利用すること最もちかみちである。そこで種種な方便を以て孫逸仙に近き、大正十三年一月國民黨内に共産主義者を加入せしめ、こゝに國民黨に左右両派を生ぜしめた、以來勞農政府は、主として左派たる汪兆銘廖仲愷などを援助し、武器や金銭を與へるばかりでなく、十数名の顧問を廣東に送り殊に熱烈な共産主義者たる蔣介石の設立する軍官學校に二十名内外の教師を容れ、勞農式に訓練した優秀な軍隊を組織せしめ、遂に廣東から共産主義

に反對するものを驅逐し、露人ボロージン、蔣介石、汪兆銘で政治を執り嶺南に共產主義の政府を建立せしむるに至らしめた。國民黨の右派には李烈鈞、馮自由など絶對に共產主義に反對するするものもあるが、唐紹儀、孫科など中立的のものもあり、又往々半赤化したものなどあって、問題に依っては左派と協商もすれば間接的に勞農政府と關係するもの少なくない。

馮氏と勞農

馮玉祥は軍閥巨頭中やゝ進歩的だとのことで、國民黨と接近し、昨年北京を乘つ取つて以來、益親密になつたやうだ。從つて勞農政府としては、軍閥中藥ろう中の物とするには到底馮に及ぶものなからう樣に勞農政府が舊帝政時代の勢力範圍たる新疆甘肅外蒙古及北滿洲を打つて一丸と爲し、極東に勞農聯盟の一國を建立せんと企て居るので、滿洲及東部蒙古を占領している張作霖を排斥する必要あり、彼を排除するには是非共その正（ママ）敵たる馮玉祥と結託せなければならぬ。又馮氏の立場から觀ても、張氏と抗爭する爲に、勞農政府の援を借たいこと言ふまでもない。最近勞農政府から蒙古を經て小銃一萬大砲數十門を馮氏に送付したのみならず、二十名の将校と若干の歩兵とを教官として派遣した。この外信（ママ）偽の程は明かでないが、両者を連結する密約締結せられたとの説もある。

政變悪影響

馮氏や國民黨の右派のものが、勞農政府から援助を受けたからとて、赤化したと言ふ譯に行かないこともちろんであつて、恐らく自己の便宜上單に勞農政府を利用するに過ぎないだらう。從つて彼等が政權を執つた所で、外人の恐れているやうに、直ちに勞農政府に依つて不平等條約の廢棄や、對外債務不償還などを宣言するやうのこと絶對になからう。然し勞農政府と直接關係あるものが局に當ることは、外國人にとり多少の脅威であり、若し一身を和平統一に捧げて居る段祺瑞を押こめ、勞農組織にならつた委員制で政治を行ふことゝなれば假令精神において赤化せないでも形式上甚だ面白くない、やがて何等かの悪影響生ずるだらう。（中央に右「馮玉祥」、左「唐紹儀」の写真）

【三】11 月 16 日（朝刊）

戰爭か平和か

馮玉祥は呉光進の部下通州にあるものは一旅の武装を解除したのみで未だ豫定のクーデターを行はず切（しき（ママ））りに他意なきことを弁明する。孫傳芳は破竹の勢ひで徐州を陥れたが、江蘇境内から奉天軍を驅逐した後、復前進しない。岳維峻は呉佩孚の舊部下を曹州まで派遣して、孫傳芳と連絡を通ぜしめたが竊に張作霖と妥協を試みて居る。呉佩孚は北上して会稽の恥を雪ぎたいのだが、蕭耀南動かないので、止むを得ず、四川湖南の味方の長江を下るのを待つて居る。段祺瑞は必死となつて是等諸將と張作霖の間を調停し、遂に停戦令を下すに至つた。目下國際會議が北京に開かれて居る際、停戦令に背き戰を敢てしたとの悪名を被り、世界より非難せらるゝは、何人も耐へられない所だ。それで支那一流の妥協説高く、時局安定したとの報さへ傳はつて來た。果たして然るときは、支那のため慶賀すべきであるが、戰局の支配者である馮玉祥と張作霖とは、全く戰備を撤した譯でなく、他面反對の情報もあるのだから、にはかに時局安定したと樂觀するのは尚早でなからうか。馮玉祥は八萬五千の手兵を有して居るが、獨力張作霖と爭ふ力なく、數々勞農政府より武器彈藥の供給

を仰ぎ、目下外蒙古の首都庫倫方面より、陸続巨額の小銃大砲飛行機装甲自動車の供給を得るばかりでなく、多數の赤露兵の來援を受けつゝあるから、軍備の充實するまで、口實を設けて、戰ひを延ばすのが有利である。之に反し張作霖は既に直隷の平野に配備した兵十萬を超え、長子學良の外、李景林、馬瑞雲、郭松齡など保定天津その他要地に陣取り、熱河の闞朝璽も又數萬の兵を率ひ古北口に向ひ、ほとんど北京付近の馮軍を遠巻きにし、意氣すこぶる揚がつて居る。幸ひに停戦令効を奏し、馮張の間に妥協成立したと報せらるるも、何日か互に戰爭することになり、戰爭していづれが勝つても、勝者に反抗するものが出て來て戰爭止むことのないのはたれも知つて居る通りだ。從前なれば戰爭止まなくても、甚だ恐るゝに足らなかつたけれども、勞農政府が支那各方面にわたり赤化運動を盛んにするに至つた今日にあつては、深く憂ふべきである。

赤化の素質

日本の支那學者支那通の間に勞農政府が以下に赤化運動を試みても、支那を赤化すること出來ないと説くものがある。諸外國が極力赤化防止に從事するに拘らず、支那に限り赤化運動に放任しながら赤化する憂ひないとすれば、支那には赤化すべき素質ないことになるが、必ずしもさうでない。孔子が寡を患ずして均しからざるを患ふと喝破してから、後來の支那學者及政治家は、冨の不均を救濟することに意を用いた。この思想は無知な人民にもしみ込み、宋代王小波なるものは、貧富を均しくすること叫んで亂を起した。支那には古くから社があり、清代から今日にかけて白蓮會、三合會、哥老會などと呼ぶものがある。是等秘密結の多くは、財產を共有したものだ。國民黨が嘗て北支那有名な土匪樊鐘秀と會したとき、樊は『我等既に共產を實行して居る、諸君に比すれば先覺者と名付けても可い』と放言した。この種無頼漢ばかりでなく、洪秀全が太平天國を創建し南京を首府としたとき、南京城内に共產主義を實行したことは、人人の知る所だ。清末の大儒康有爲が禮記の禮運編を祖述し、大同の説を立て、無國家、無家族。共產公妻を主張したことも又周知のことである。かくの如く學者の説にも、實際方面にも、赤化すべき素質支那民族の血液内にある。それが動亂の頻發、經濟上の壓迫、列强の侵略などに苦しめられてゐる際、巧妙な勞農政府の宣傳を受けて、赤化せずに居られるだらうか今や勞農政府は舊帝政時代の勢力範圍たる外蒙古を聯盟内にまき込み、東支鐵道沿線の一帯を赤化し本部にありては北京上海廣東を根拠とし、學者學生間に勢力を扶植し、勞働組合を味方に引入れ、一般國民に共產思想を吹込み、相當に効果を收めつゝある。廣東一帯の如きは蒙古と同樣、聯盟の一員としたこと既に述べた通りである。從つて今や支那民族に赤化し得べき素質あるや否やの問題でなく、如何なる程度まで赤化さるべきやの問題であると信ずる。

【四】11 月 17 日（朝刊）

勞農宣傳成功

一九一九年七月二十五日、勞農政府はカラハンの名を以て支那南北政府及國民あての一の宣言書を送つた。その大要にいはく『勞農政府は支那人をして外國の資本と武力との束縛から脱せしめる。舊帝政時代支那との間に締結した一切の條約を廢棄し、かつて奪取した土地租界及一切の權利を、何の賠償を求むることな

く永久に支那に還付する』と。當時支那は世界の風潮に拠り思想上に革命を來しつゝあつたに拘らず、依然として列强の資本と武力とに壓迫せられ、大いに煩悶して居つた際だから、天らいの福音の如く喜びいはゆる読書人階級は滿こうの謝意を表した。幾何ならず列强が臨城事件に依り支那を威喝して居る時會々カラハン北京に入り、王正廷と平等條約を締結したのでいよいよ彼等を有難からしめた。カラハンが支那人の國權回復に熱狂するに乗じ、先づその望みを適はしめて、支那輿論の本家たる知識階級の心を収め、然る後漸次共産主義を流布したのは、確かに老朽と言ふべきである。以來カラハンは北京に居り、上海廣東等に部下を派遣し急進主義の國民黨や學者學生を味方に引入れ、精神的物質的援助を與へ、共産主義の普及に努力せしめ、今や北京上海における諸大學の教授學生その他の知識階級中、同主義をじゅん奉する多く、外國資本家に對する同盟罷工、その他の排外運動を指導するばかりでなく、國内に革命の機運を醸して居る。彼等の内には、革命を第二位に置き、國權回復を目的とする愛國者も少なくなく、又無心で革命を叫んで居る者も多いが、これ等無心の叫びは露國の大革命をじゅん致したものでないか。

勞働組合赤化

知識階級に反し、支那勞働者は知識程度低く、之を强固な團體に組み立て、革命思想を吹き込むこと不可能なりとの説あるが、實際必ずしもさうでない。支那商工業者は、何れも皆ギルドを組織し、相互扶助共同擔保に任じ、ボイコツトなる武器で自衛したから、現時のいはゆる勞働者も又之にならひ、强固な團體を組織すること出來るのである。左傾の知識階級の指導や露人宣傳者等の援助を得たので、歐米式の組合を組織し更に各組合を聯合し、總同盟を建立することになつた。その内大なる者は上海總工會と、鐵路總工會である。上海總工會は、大正十一年五月上海における三十餘個の勞働團體の聯合に依り成立したものであつて、その發達すこぶるはやく、大正十四年七月二十八日における加入組合一百十七個、會員二十一萬八千八百五十九名で勞農政府に眞似た執行委員制を整へ、共産黨員その牛耳を執つて居る。鐵路總工會は國有十一鐵道從業員を網羅したもので、大正十三年三月創立の際、軍閥の爲、準備委員や會員の頭目中、左傾分子の多くが、殺傷せられたので、軍閥に對する反感心すこぶる强く、赤色國際勞働組合に加盟し、『支那勞働者の敵は、軍閥資本家及列强の帝國主義である。吾人はあくまでも彼等を倒さなければならぬ。吾人は革命の勞働者である』と宣言した。この外に支那全國勞働會議なるものあつて、二回許り、廣東で開かれた。第一回は大正十一年五月一日催され、司會者鄧康報は、吾人の大目的は勞働者の國家を創造するにありと宣言したが、別段過激な決議はなかつた。第三インター・ナショナル活躍の爲、遂に、赤色國際勞働組合に加盟することを決議したので、勞働組合所屬のもの四十五萬人は、色付けられた。農民は何れの国においても、極めて保守的であるが、廣東政府は、露人と共に、勞農式に管下農民を訓練したので、その農民はインター・ナシヨナルに加盟するもの、既に二十萬に達した。以て支那における勞働階級の傾向を知ること出來るだらうと思ふ。今夏上海における同盟罷工の、如何にも大仕かけで、秩序的で、耐久力に富んで居つたことは、決して偶然でない。今後同盟罷工起る毎に

益この傾向を強めるだらう。

革命の醸生

支那勞働階級につき、他国のそれと異なるは、宗教的秘密結社に加盟することである。彼等の多く加盟するのは、支那全國はもちろん南洋方面にはびこつて居る三合會だ。揚子江一帯殊に上海付近においては、青幇紅幇に加盟する。これ等は何れも皆信仰を利用して人々を結着け、吉凶禍福を共にする强固な團體であつて、常に綱紀荒廢し、官憲横暴で、内乱頻發し、下民に不安と不平の多く、革命を望む時にぼつ興する。若し首領に野心あり、機會發生する時は、暴動を起こすこと、漢代から清代にわたり、枚擧するにいとまない。從つて勞働者が、これ等秘密結社から體驗した了を、その加入した組合に適用し、機會に乗じて之を秘密結社に化すること、困難でなからう。支那勞働組合が左傾し、赤色勞働組合に加盟するに至つたのは、單に第三インタ・ナショナルの活躍のみによるでなからう。支那の和平統一行われず、動亂依然としてやまなければ、勞農政府の運動と、學者や學生の吹鼓とに拠り、支那勞働階級はいよ／＼左傾し、何日か黄巾の賊や白蓮教徒や三合會と異なつた新式の形で、爆發し、勞農政府をして拍手せしめる恐れあるだらう。

【五】11 月 18 日（朝刊）

赤化の發展

勞農政府は、世界を赤化する道程は、歐洲を通過するよりも、寧ろ東洋を通過することを近道なりとし、今や全力を支那赤化に集注して居る。北京に赤化運動の總本部を置き、勞農代表の指揮の下に、一切の義務を決行し、上海に支部を設け、各種の部門を置き手腕家を配置し、運動せしめて居るが、宣傳部長のチエルカソフ氏の活動がすこぶる目覺しい。廣東にはボロージン氏等をして廣東政治に參與せしむる外、特務機關を設け、南支那及び南洋方面に宣傳せんと企てゝ居る。赤化の方略は既説の通りであつて、赤化運動の爲本國より少からぬ人と巨萬の金を送るばかりでなく、武器をも送つて居る。卽ち支那知識階級に宣傳し、勞働者を組織的に武裝し、勞農政府に好意を寄する軍閥に援助するため、夫々適当な文武の役人乃至宣傳者を支那に派遣せるもの数千人に達して居る。金は北京總本部の裁量に任せて居るものでその消費高毎年二千五百萬ルーブル内外であるが、今後四千萬ルーブルに增加する豫定だ。これは赤化に必要なあらゆる方面に支出せらるるもので、上海における同盟罷工に關し四五十萬ルーブルを支拂ひ、某督軍の擧兵に對し、一百萬ルーブルを交付するといふ類である。武器は馮玉祥に供給するばかりでなく、廣東政府に對しても常に供給を怠らず最近大砲六十門小銃二萬を供給した。殊に怪しいのは、北滿地方に武器を密輸入することであつて、過日東支沿線で小銃四萬差押へられた。かくの如く支那全土に亘り民衆乃至軍閥を赤化することに勞力して居るが、目下非常にせう心奮励して居るのは、北京に親露政府を樹立し、廣東と同様にしたいことである。それには豫て親密な國民黨系の政客だけでは不十分であるから、馮玉祥を利用せんものと企て、昨今喧伝せらるゝ通り、馮氏と防守同盟の密約を結び、機を見てクーデターを行はしめ、勞農式の執行委員制を設けしめんとして居る。然してこの目的を達するにつき、最も障害となるものは、馮氏の敵たる張作霖と、東洋平和の確保をを以て自認して居る日本である。從つて南北方面から、張作霖

をけふ撃することを圖るのみならず、英國と張作霖とを提携せしめ、日本と張作霖とを離間し、朝鮮人に對し、宣傳と扇動を盛んにし、日本をして、支那を顧みる暇なからしめんとしての企てであるとのことだ。支那の動亂を聞き、にはかに歸支することとなつたカラハン氏今後の行動大に注目すべきであらう。

應急處分

上述の如く、支那における赤化運動はすこぶる發展し、之をそのままに放任するときは、大事をひき起し、禍を隣國に及ぼすのだから、今をおいて之が救濟の方法を講究せねばならず。根本的に救濟することはほとんど不可能であるから、當分應急の處分に滿足せねばならぬ。

支那の赤化、今日あるを致し、今後益（ますます）甚だしからんとするものは軍閥割據し、動亂止むことのないのが重大原因であつて、勞農政府も支那を動亂化することに努力しているのだから兎に角和平統一を圖ること急務である。支那の輿望を負ふた段氏執政の下に、堅固な中央政府を建設するにつき、その所用に應ずる目的を以て、關税會議の開かれることは和平統一を致すべく、絶好の機會だ。本會議を打壞する爲、あらゆる努力を試むるのは、勞農政府として當然であるが、その走くとなって、本會議の打壞に從事する政客や軍閥の眞意、甚だ諒解するに苦しむ。殊に遺憾なのは、支那全権がしなしば會議を頓挫せしむる言動に出づることだ。又不幸にして日英兩國全権互に意見を異にし、往々議論のために議論を戰はし、在支英人の如きは、會議の中止を望む模様すらある。若し萬一會議が不成功に終つたならば、段執政その地位を失ひ、支那の和平統一も永久に望みなく、動亂に次ぐ動亂を以てし、遂に勞農政府をしてその目的を達成せしめる恐れある。かくの如きは支那の一大不幸たるに止まらず、支那の隣國たる日本もまた枕を高ふする能はざるはもちろん、アジアに廣大な領土を有する英國に悪影響を及ぼすことあきらかである。從つて日英支三國中互に赤誠を披歴（ママ）し、適當な條件で妥協し速かに會議をまとめ、支那の一人者たる段氏をして堅固な政府を樹立し、和平統一の便宜を得せしむべきであらう。（完）